

街の活力は
自立と創造から

あのまちこの街

エコラベーション商店街

環境に優しい街路灯から 生ゴミのリサイクルまで



厚木なかちよう大通り 商店街振興組合 (神奈川県厚木市)

神奈川県厚木市は人口約二十二万人。相模川をはじめいくつもの支流が市内を流れる。本厚木駅から徒歩十五分程。富士山のふもと山中湖に源を発し、多くの河川が合流して相模湾に流れ込んでいく。相模川は、古くから鮎漁が盛んだ。また厚木市街から北西へ八キロ、大山の東麓に位置する東丹沢温泉郷は、駅前バスセンターから十分。東丹沢山麓の東端の飯山温泉郷へは二十分である。

厚木なかちよう大通り商店街は小田急線本厚木駅前であり、地球環境の保全にむけた取り組みを行なっている。同商店街は平成十三年から、本格的に環境対策事業をはじめた。空き缶・ペットボトルの回収やエコバック運



小田急線本厚木駅前に伸びるなかちよう大通り

循環型のエコ・リサイクル

「エコステーション」と名付けられた専用ブースに、空き缶・ペットボトル専用の回収機二台を設置。月に一万二千、三千個もの回収があり空き缶が六割を占める。さらに平成十五年十月には、エコマネーを利用した有機性循環資源リサイクル事業を企画した。

これは家庭から出る生ゴミを商店街で回収し、地域活動などの活動を行なっている。

ハード事業にも乗り出し、環境に優しい街路灯を設置した。また生ゴミ堆肥化とエコマネー活用を組み合わせ、画期的な事業は、環境省公募の「循環型社会形成に向けたエコ・コミュニティ事業」に正式採択された。

このシステムは、次のようになっている。まず飲食店や住民から集めた生ゴミを、市販の処理機で乾燥させ牛ふんなどを混ぜ合わせ堆肥を作る。

エコ・ステーションは今や 月に1万5千本を回収する

循環型のエコ・リサイクル

貨を消費者に渡し、回収した生ゴミは堆肥化、地元農家などで使用し野菜を栽培。同商店街で販売するというものだ。環境省公募の「循環型社会形成に向けたエコ・コミュニティ事業」に応募。二百三十九件中、正式採択五件の一つに選ばれた。

実現にむけた検討会を昨年十二月に開催し、行政、事業者、専門家や市民を招き議論を重ねた。

パイロット事業で手応え

このシステムは、次のようになっている。まず飲食店や住民から集めた生ゴミを、市販の処理機で乾燥させ牛ふんなどを混ぜ合わせ堆肥を作る。

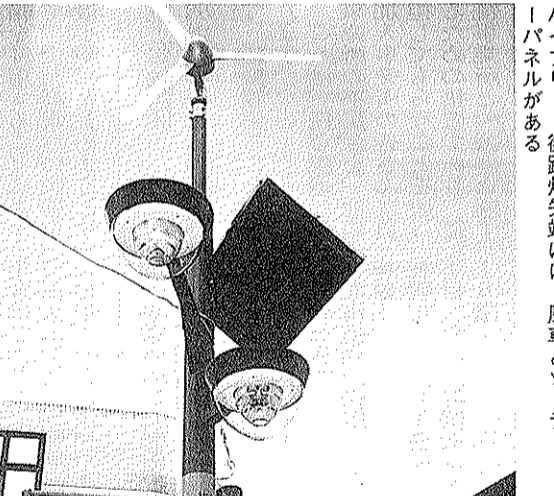


電光掲示板が付いているハイブリッド街路灯

全国初ハイブリッド街路灯

平成十五年二月には風力・太陽光を利用した「ハイブリッド街路灯」を導入した。設置にあたって、商店街で使えるエコマネー（地域通貨）を受け取るというもの。今年四月十四日に行った実験（パイロット事業）では収集日に向けて、ダイレクトメールなどで周辺住民らに告知し、当日は四百三十キロの生ゴミが集まった。

現在は処理機で乾燥させ、東京農業大学に持ちこ



ハイブリッド街路灯先端には、風車とソーラパネルがある



APAカードのサービスを店頭に表示する加盟店

平成十年七月、ICカードを導入し顧客確保への対策を始めた。「APAカード」と呼ぶこのカードは、買い物百円ごとにポイント提供。次回以降はポイント提供。次いで商店街での買い物に利用できるように、加盟店は現在二十五店、ポイントを一三四で買。ポイントを利用して映画鑑賞券などのプレゼントをもらうこともでき、さらに会員になると、商店街のインターネット無線LANを無料で利用できる特典がある。



住民の協力で400の生ゴミが集まったパイロット事業

コラム

厚木市は山の幸が豊富だ。近郊にある温泉ではワラビ、キノコ、山芋など、素材を生かした素朴な山菜料理が食べられる。

また、相模川をはじめいくつもの支流が流れる厚木は鮎漁でも有名。鯉・鱒・ハゼなどもとれる。新鮮な味を楽しませる川魚料理店が多い。料理山温泉には名物のタニシ柳川や変わったところでは刺身などが楽しめる。

六月から十月にかけての若鮎のシーズンには、河原には鮎を焼く香ばしい匂いが漂う。屋敷や料亭など、鮎を堪能できる様々な料理を登場させる。

地域全体で取り組む

ハイブリッド街路灯に設置した通信補助用機器により、商店街のインターネットが利用できる。今年四月から市内内外の生産者、商店、メーカー、団体、学生、市民らとの交流を深める目的で「あつぎ七（にひち）の市」イベントの一環として、全国各地から、美味しいものを取り寄せ試食会を開く。四月には長野県飯山市の雪下になじんを取寄せた。これは積雪五日の雪が溶けた四月から

五月にかけて収穫したもので甘味が好評だった。五月は沖繩の黒糖だった。東京農大で堆肥化した有機野菜も販売していく予定だ。

昨年十二月には、神奈川県とかがわ地球環境保全推進会議から、「かがわ地球環境賞」を受賞した。県内で地球環境保全に向けた実践的な活動を行なっている団体・企業に授与されるものだ。

木村理事長は、街の活性化は環境対策に地域住民みんなで取り組んでこそという。街路灯設置時に立ち上げた「エコラベーション」。エコとコラボレーション（共同作業）の造語をスローガンとして、地域全体で協力している。



エコステーションの空き缶回収機（右）とPETボトル回収機